

ラテンアメリカという土地について

- ・時間と民族の多様性
- ・遅れて来た「文学語の幼年期」（『芸術の運命—アリストイオスの蜜蜂たち』）
- ・魔術的な(驚異的)現実と腐葉土としての神話、伝説

ラテンアメリカ文学史の概観(かなりザックリと)

前史…文学といえばヨーロッパの小説で、首都在住の特権的文化階級人により嗜まれた。政治権力と結びついた彼らが文学出版を支配下に。

黎明期…アヴァンギャルドと地方主義小説による反発。国家統合事業と地方主義小説との親和性から文学の地位は向上したが、政治の道具と化した。

揺籃期…魔術的リアリズム、アルゼンチン幻想文学、メキシコ新小説の3本柱が文壇の停滞打破を図る。徐々にヨーロッパで存在感を放ち始める。

発展期…フエンテスに牽引され、ラテンアメリカ文学が世界文学に合流し始める。キューバ革命時のフエンテスの働きが、作家間の団結を強化。

成熟期…マルケス『百年の孤独』が爆発的にヒットし、「ラテンアメリカ」がブランド化。しかし、作家間の不和や政治問題への傾倒で下火に。

衰退期…ブームが下火のなか、名作のカノン化が進む。大物作家の「回想録」ブームは、研究への貢献と文壇の衰弱状況の露呈という二面性を持つ。

転換期(?)…大物作家が次々と亡くなる。ボラーニョ亡き後、リョサやバスケスに比肩する作家は出てきていないが、悲観する必要はなさそうだ。

2004	90s	82	80s	70sL	73	71	70	68	67	63	62	59	58	55	53	52	46	44	40	30	20sL~	26	1910h~							
ボラーニョ『2666』	△文学の量産化	△「回想録」ブーム	△アジェンデ『精霊たちの家』	△名作のカノン(規範)化が進む	△ラテンアメリカ文学ブームが下火に	△ピノチエト軍事政権成立(〜90)	△パデイージャ事件(革命政府の言論弾圧)	△ドノソ『夜のみだらな鳥』	△ペルー 軍部が政権掌握	△パリ五月革命	△メキシコの学生運動弾圧	△孤独』	△世界文学の最先端へ—マルケス『百年の孤独』	△リョサ『都会と犬ども』	△コルタサル『石蹴り遊び』	△キューバ危機	△キューバ革命	△フエンテス『澄みわたる大地』	△ルルフオ『ペドロ・パラモ』	△カルペンテイエル『失われた足跡』	△バティスタ独裁政権成立(〜59)	△ペロン政権成立(〜55)	△ボルヘス『伝奇集』	△カサーレス『モレルの発明』	△アストウリアス『グアテマラ伝奇集』	△文学の刷新とヨーロッパへの侵入	△国家統合事業に伴う小説の地位向上	△地方主義小説の登場—リベラ『渦』	△アヴァンギャルドの勃興(反発と刷新)	△アルカディアの文学支配